

優秀賞

— 福島県知事賞 —

私が目指す「新しいまち」とは
～人と人とのつながり福島県立只見高等学校2年 ^{ワタベ} ^{マコ} 渡部 茉子

2011年の東日本大震災発生から10年という月日が経った。

私は震災当時6歳で、3月の保育園卒園時の小学校入学を目前にしていた時期で曖昧な記憶しか残っていない。しかし、津波で自動車や家屋が流される様子をTVで見て、幼いながらに大変な恐怖を感じた事だけは覚えている。

私の住む只見町は、奥会津地方の日本有数の豪雪地帯で、海からも遠く離れているのだが、同年に発生した「平成23年7月新潟・福島豪雨」によって、只見川が氾濫し、激甚災害に指定された大規模水害が発生した。私の自宅は無事だったが、近所に住む祖父母の家は床上浸水の大きな被害を受けた。家の壁や畳は泥まみれ、家の骨組みだけが剥き出しになった様子は今でも忘れられない記憶だ。幸い祖父母は2階に避難し無事だったが、飼育していたニワトリ等の家畜は全て流されてしまった。福島県の農林水産被害は約99億円に上ったという。だからこそ、私にも町を襲った津波に対する恐ろしさはわかる。

原発災害があった相双地区同様、只見町も電気を生み出す町で、只見川には複数のダムがあり、水力発電という再生可能エネルギーで最大の基地となっている。原発災害で未だに故郷から離れた生活を余儀なくされている方がいることは他人事には思えない。令和3年の復興庁の福島県民の避難者数調査では現在でも、6916人という多くの方が10年に及ぶ避難生活を送っている。自らの住み慣れた故郷を遠く離れ、慣れない土地での生活は、身体的にも精神的にも負荷がかかるものだと思う。

一方、大幅に放射線量が低下した現在でも福島県全体に根深く続くのは風評被害だ。検査で安全性が確認された福島の美味しい野菜や果物であっても、疑いの目で見られてしまうことがある。山菜の宝庫の只見町でも、「コシアブラ」という山菜しか出荷制限がかけられていないにも関わらず、「コゴミ」、「ワラビ」等、すべての山菜の販売量が減少しているという。まだ福島の食べ物に対して嫌悪感を抱く人や、福島の食べ物の魅力に触れてもらえないのはとても悔しい。第一原発の処理水の海洋放出も決まり、10年経過してもさまざまな影響があることが伝わってくる。

そんな中で私たちは、総合探究の授業の一環として只見町の企業の方々と協力したプロジェクトを行った。地域循環・地産地消を目指して、只見の農産物と只見の企業で売られている商品を使ったオリジナルレシピを考えました。それは「えごま豆乳ラーメン」というものだ。只見町のトマトやえごま油、町の麴店の麺などを材料とした。

購入した方には、只見の農産物にも興味を持って欲しいと考え、手書きのレシピも作成した。さらには、只見町全体に興味を持ってもらいたいという願いも込めて商品開発をした。そのようなことで何が変わるのかと思う人もいるかもしれないが、その小さな取り組みの積み重ねこそが大事と私は考える。どんなに小さなことでも、それをきっかけとして只見町を、そして福島を知ってもらうことにつながるはずだ。

この活動で町の方々との交流を通して、私は改めて只見町民の良さも感じる事ができた。普段の何気ない日常でのちょっとした気遣いなど、とても恵まれた環境にあると感じる。当たり前だと思っていたことが、実はとても有難いことだと気付いた。そのような町に暮らす人々の良さも知って欲しいのだ。バーチャル空間でなくリアルな体験として、実際にその町に来てみて、その町に住む人と交流して、その町で生産された物を現地で食べて、町そのもの、町全体をトータルに知ってもらうことこそが何よりも風評被害への対策となるはずだ。

現代はICTの推進により人の仕事は次々にロボットへと変化しているが、人間同士のコミュニケーションの中で生まれるものや、小さな触れ合いの積み重ねからなる、人と人との関係にこそ、現代に生きる私たちが見失っている大事なものがあるのではないか。人類の歴史上、人間が積み重ねてきた人と人との触れ合いにこそ、若者ことばの「一周回って新しい」、そして、むしろ逆に「古くて新しい」価値、その先の未来にある本物の「新しいまち」にとっての必要十分条件と言えるのではないか。そして、さらに現在のコロナ禍に苦しむ社会では、ソーシャルディスタンスが取られ、テレワークも推進されている。学校でも、感染拡大防止対策のもと、黙食のお願いや、学校行事ができない、何よりお互いの表情がマスクで見えない等、ますます友人との楽しい時間が削られている。そもそも人と人とのコミュニケーションは、「オンライン」だけで成立するものではないはずだ。

原発被害、津波被害、豪雨水害から10年が経過し、復旧も進み「新しいまち」が建設され、インフラ環境は整ったが、人と人とのコミュニケーションという心の交流も、当然「人間」が暮らす未来、福島の復興には必要なのだ。その物理的な面と精神的な面との両方とも、そこに暮らす人々が実感できること、これこそが私が目指す本物の「新しいまち」だ。